



GARDEN LIFE.

土が呼吸する庭

植物に元気がない時は、水をやり
肥料や消毒に頼る。
ほとんどの人が、このような手当てを
正解だと考えるでしょう。
ところが根本の問題は、植物ではなく
見えない土の中にあることも少なくありません。

近年注目を集めているのが
「土中環境改善」というアプローチ。
水と空気が巡り、土が呼吸を始めることで
植物も人も健やかに暮らせる庭へ——。
庭師・小森穂高さんが実践する庭づくりから
自然との付き合い方を学びます。





小森 造園

株式会社 SOTO
三代目代表 小森 穂高氏
KOMORI HOTAKA

アパレル商品開発の仕事を辞め、祖父の代からの家業を継いだ小森さん。転機となったのは、土中環境改善の提唱者・高田宏臣氏との出会い。近年は造園にとどまらず、土中環境改善を通じた環境保全に情熱を注ぐ。



空き家のリフォームを断念し、家を新築することに。室内にも多く採用した杉材を、外観にも使用。ずっと以前から存在していたかのような趣を醸し出す。

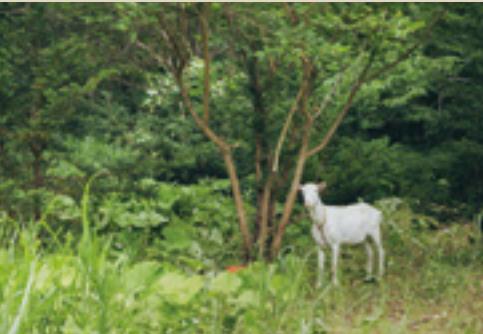
水と空気を循環させる
「土中環境改善」とは？

植物を植えるように、家を建てる。―― I 邸の庭づくりの根底にあるのは、この思想です。「信濃町は、四季が本当に美しくて、自然が色濃い土地。この風景を壊さず、馴染む家をつくりたかったんです。私にとって、家が風景の一部になることが大事でした」と、施主の I さん。人が暮らし手入れをすることで、風通しの良い土地になり、生き物たちが戻ってくる。そんな好循環をつくりたいとも話します。

実はこの家は、2 軒目のマイホーム。「東京の前の家は、訳あって数年で取り壊しに……。膨大なゴミが出て、本当に切なかったです」。その償いとして、次はできるだけ環境に負荷をかけない、土に還る家にしたいたいと考えようになりました。

そこで選んだのは、逆丁字型の基礎で建物を支える「布基礎（ぬのきそ）」です。床下全体をコンクリートで覆う「ベタ基礎」と違い、床下は土のまま。家の中と外が、地続きになっています。庭に植物を植えるように、この家を自然の一部として機能させる

ためには、外とつながっている床下の土壌環境を整える必要があります。そこで白羽の矢が立ったのが、「株式会社 SOTO（小森造園）」の代表・小森穂高さん。家が建つ前という異例のタイミングで、建築士×庭師がタッグを組み「土中環境改善」に着手しました。





この土中環境改善とは、水や空気の流れを促し、『呼吸する土』へと導く技術体系です。小森さんによると、「家を建てるために土をひっくり返せば、今までの生態系がすべて崩れます。やがて粘土質になった土には、水が浸透せずとんとん固くなる。周囲の植物や生態系にも悪影響が及びます。人間だって血の流れを止めた

ら壊死するし、そこから壊死が広がっていきますよね。つまり、流れあるものを止めないことが、とても大事なんです」。作業には、重機も難しい計算もありません。手作業で、誰でもできる手法だからこそ「人を集めて、やり方を学んでもらおう」と、I邸でワークショップを開催することに。地面に

炭化させた木杭を打つ、縦穴を掘り、竹炭やもみ殻燐炭、わらなどの有機物を入れて穴を埋めるといった作業には、多くの人の手が入りました。炭やわらには、無数の「菌糸」が付着しています。この菌糸の働きで水と空気を動かし、土の呼吸が始まる起点をつくる。土中環境改善の目的は、この一点に尽きます。

I邸は調湿・蓄熱に特化した自然素材の家。「木摺り下地」の土壁や無垢のスギ材、レンガといった、土に還る素材でできている。「もみ殻断熱や土壁の塗装にも、多くの人たちが関わってくれました」



庭で育てた植物をドライにしたり、部屋に飾ったり。手を伸ばせばそこにある自然が、Iさん一家の暮らしを彩る。玄関の先は、心地良い風が吹き抜ける通り土間。



通り土間から眺める庭の風景は、まるで額縁に収まった絵画のよう。床は固めず、コンクリート平板を置くだけに。床下には砂と碎石を敷き詰め、その下の土は庭とつながるように配慮した。



小枝に白く広がって見えるのが菌糸。地中にのびていき、植物同士をつなぐネットワークをつくる。土の粒子を団子状の塊にし、水と空気が巡る「団粒構造」の土を育む役割も。

床下の次は、庭の土中環境改善です。豪雪地の家には雨どいがないため、雨落ちに水がたまるという悩みがありました。そこで、前述の手法で雨水の浸透を促し、水はけの良い

地中の菌糸を介して植物は『会話』する

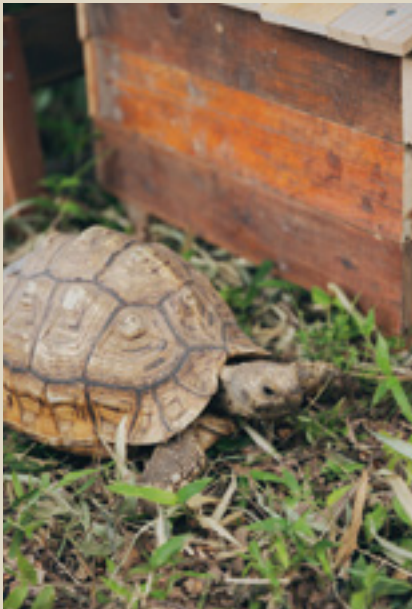


急な斜面は水が流れてしまい、土中に浸透しづらい。一緒に土も流れ、ぬかるんだ足元に。この斜面を丸太の階段にすることで、環境と人の暮らしに負荷をかけない庭へ。

環境をつくりました。水や土が流れてしまう急な斜面は、伐採木の丸太を据えて階段に。水が染み込む余地をつくり、歩きやすくするためです。これらの作業もワークショップ形式で行い、多くの参加者が体験。秋には、斜面を階段化するワークショップ第2弾も予定されています。

呼吸を始めた土の中は、どんな世界なのでしょう。そこには白い糸のような菌糸が張り巡らされ、植物と植物をつなぐネットワークが形成されています。「木の根と根が菌糸を介して、情報伝達や危険の察知、栄養の交換もするんです。人間だって1人より仲間と助け合った方が、生きやすいでしょう」と小森さん。土中は、多様な植物たちのコミュニケーションの場なのだと語ります。

荒れてはいいたものの、既存の植栽と起伏に富んだ地形が残る庭。その再生に迫られるIさんですが「丸投げにはしない。自分で庭をつくりたいんです」と、意気込みます。頼りになるのは、ワークショップから得た知見。自分で考え、手を動かす庭づくりは始まったばかりです。



家を建てた時に出た端材が、木製の園芸用ラベルに。丸太の階段には、敷地にあった杉の伐採木を使うなど、本来なら捨てられてしまう資材を活用することにこだわった。庭の一角には、リクガメのチャチャ。ほかにも犬・猫・ヤギと、I邸には生き物がたくさん！



荒れて鬱蒼とした庭に手を入れ、再生に取り組むIさん。残っていた植栽は生かし、草刈りや木の伐採を地道に続けてきた。「きっといい庭になる」という予感ほ、確信へと変わりつつある。



自然食品や雑貨のお店「siki」を営むIさん。仕事もプライベートも、人と自然に優しいライフスタイルを貫く。「新築にあたっては、以前の家のキッチンや窓などを再利用しました。少しでも捨てるものを減らしたかったです」

環境との付き合い方を学ぶ
ワークショップの意義

土中環境改善の本質は、「技術」ではなく「物の見方」。そう話す小森さんが大切にしているのは「土地を読む」ことです。「そこがどんな風土で、どんな歴史的背景があるか。風の吹き方や日当たり、標高はどうか——こうした情報に基づいて、改善への道筋を立てます」。土地に心を寄せる視点をもてば、やるべきことは自然とわかる。だからこそ、ワークショップが必要だと強調します。「技術よりも、環境をどう捉え向き合うかを学ぶ実践の場。体験を通して体で覚え、感覚を培っていきます」

古来の人々は、ごく当たり前に土中の環境を整え、自然と共に生きてきました。今や消えつつあるこの知恵を蘇らせ、自然との共存の気運が高まっていくことが、小森さんの願い。まずは、足元の草木や土の営みに目を向けてみる。そんなささやかな行動の先に、人と自然が幸せな関係を築く未来があるはずです。



「草木を植えていくことで、もっと健やかな庭になる」と、未来の景色を思い描く小森さん。植栽には、人が踏み入らないようにする意味もある。人が踏み固めてしまう場所の土中環境改善など、この先も庭づくりは続いていく。